



Title	遊戯する生への変容：ニーチェの場合と良寛の場合
Author(s)	圓増, 治之
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47100
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	圓 増 治 之
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 20576 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 4 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	遊戯する生への変容—ニーチェの場合と良寛の場合—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大橋 良介 (副査) 教 授 須藤 訓任 教 授 上倉 庸敬

論 文 内 容 の 要 旨

論文の題名は「遊戯する生への変容—ニーチェの場合と良寛の場合—」となっている。ここで言う「変容」は、さしあたりはニーチェが『ツァラトストラ』で用いる「ラクダ→獅子→子ども」の変容のことである。ニーチェはこの比喻によって、まずは精神がラクダの姿を取って一切の負荷を担って耐えること、次にその忍苦の完遂によって一切の主たる獅子の精神に転じ、最高の価値からも自由となること、しかし第三に、その獅子も「子ども」の精神へと変容し、新たな価値を自由に創造し行く姿になることを説く。それは「生」が「遊戯する生」となることでもある。しかしニーチェ自身の肉体は、この自由な価値創造の遊戯の手前で、狂気の淵に墜落した。圓増氏は、ニーチェにおいて実現しなかった「遊戯する生」を、良寛の生き方と思想において見ることが出来るとする。かくして、副題は「ニーチェの場合と良寛の場合」となる。

第一部「生のメタモルフォーゼ」は五章に分かれ、ニーチェの「力への意志」の思想を、生のメタモルフォーゼに関する教説として跡づけ、再構成する。ニーチェの「力への意志」が、実体的に解されてはならないこと（第一章）、心理学的、生理学的、存在論的な意味をもつこと（第二章）、芸術現象を通して最も良くあらわれ出ること（第三章）、そのメタモルフォーゼが単に知的な思想ないし解釈という意味にとどまらず、生そのものの自由な遊戯の実現を意味し、ニーチェの生をも越える試みを意味すること（第四章）、そして「神なしに生きる永劫回帰の生」として、現代的な意味をもつこと（第五章）、等が論述される。

第二部は、「ニーチェの場合」（第一章）と「良寛の場合」（第二章）に分かれ、まずニーチェの生き方が、何を食べたか、何を飲んだか、誰を愛したか、といった具体的な行為に即して、ないしニーチェの「肉体」の在り方に即して、論じられる（第一章）。次に良寛の詩や文章を引用しつつ、またその足跡を追いつつ、良寛の生き方がいかにして、晩年の病苦のなかでさえ「遊戯」であったかを、述べる。かくして「結語」において、ニーチェの言う「最後の意志」と良寛における「最後の意志のエボケー」とが比較され、良寛の遊戯（蕩々）のなかにも大きな「憂い」が蔵されていたことなども、指摘されるとともに、良寛の思想と生き方が、ニーチェのその本来的具現として、ニーチェの「メタモルフォーゼ」思想の「あと」（＝メタモルフォーギー）に位置することが示唆される。

論文審査の結果の要旨

ニーチェ研究において、ニーチェと良寛の比較論は未だかつてなされたことが無い。ではこの比較論は、哲学的にどこまで正当であり著者・圓増氏はその試みにどこまで成功し、これをもって学界にどのような寄与をなすと期待されるであろうか。

まず前提となるのはニーチェ解釈が牽強付会なしに、ニーチェ思想それ自身から説明されているかどうかである。圓増氏は、「力への意志」というニーチェの中心思想に内在的に迫り、これを「生のメタモルフォロジー」として浮き彫りにする。そしてそれを、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ライプニッツ、ショーペンハウエル、ベルクソン、マックス・ウェーバー、といった西洋思想全般のなかで位置づける。その上で、ニーチェにおいてなおも実現しなかった「遊戯としての生」を良寛に見出し、ニーチェと良寛の比較をおこなう。

ニーチェの「哲学」と良寛の「仏教」とは、精神的伝統の地盤を異にするから、両者を比較する場合には一定の解釈学的な吟味が必要となる。こういった吟味に関しては、圓増氏の論文はなおも補筆の余地がある。しかし氏の論文は、もともと単なる文献的ないし哲学史的考察をめざすものではなくて、むしろそのような考察の地平そのものをも問いに付す、という意味を有している。これはニーチェ自身の思想的態度とも通じるところである。圓増氏は、西洋の精神史を仏教的思想と交叉させる、という仕方で論を進める。その視点は、これまでのニーチェ研究に無いユニークなものと言わねばならない。問題の核心は「意志」の立場にある。それは西洋思想の根底に横たわり、西洋形而上学の歴史を通じてニーチェにおいて煮詰められたものと見てよい。そのニーチェにおける「最後の意志」に対して、良寛はいわば「意志のエポケー」という立場を提示した。圓増氏は、そのような良寛の立場が、ニーチェを含む西洋思想においてはなおも届かなかった境地だと見るのである。そのような見方は、たとえ文献学的ないし解釈学の見地から補筆の余地を残すとしても、大きな問い掛けとして、哲学界に重要な寄与をなすものとして考えられる。

以上から、本論文は大阪大学文学研究科の博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。